

槐

かい

岡井省二創刊

平成19年9月号

平成十九年九月一日発行 第十七巻第九号
平成三年九月十八日第三種郵便物認可

通巻第一九五号 毎月一回 一日発行



世はこともなし（『俳句四季』八月号より）

高橋将夫

花氷本音の見えてをりにけり
魂のまだとどまりし蟬の殻
子らの輪の真ん中にある蟻地獄
尺蠖の進まんとして縮みたる

駆け抜けし流鏑馬の馬的を見ず
水無月の眉に陰ある歡喜天
晩夏光桜古木のねぼり腰
釣針が鮎の心にひつかかり
積年のえにしも夏の霞かな
有象無象呑み込みしまま鶉は闇へ
天上は何も変はらず夏落葉

槐安集

水野恒彦

椎の花うすうす五欲燃えぬたる
螢火が昏き体の中に入る
水母は沖へ沖へと男低唱す
佗び寂びの国はここぞと墓のこゑ
鳴らぬ鳴らぬ麦笛夕陽中

延広禎一

甚平着て振袖海老に触れてみし
愛魚女は小振がよけれ添桶
太白や鯉のたたき燻べをる
蝦蛄売りと音戸おんどの瀬戸の日和かな
人骨の二百六本夏祓



加藤みき

青芭蕉の風音の中立ちてをり
合歓の花その面影のいきいきと
この森の夜鷹となりて鳴きにける
まだ足に土塊つきし蟬の殻
茄子の花背筋正してゐたりけり

石脇みはる

蔵六の嵐山越す土用かな
しろがねに光ゲさしわたる沼の蛇
達谷の窟々の闇青葉木菟
夏の鷹蔵王の釜をめぐけり
榊の木を勇つてゐたりし夏越かな

中島陽華

すつぽんの甲羅干しあり螢飛ぶ
白扇のひと差し舞うて西湖かな
夏安居や写してゐたる百人首
韋駄天は何処に夏の万福寺
檜扇の鞍馬へ登る空電車

竹内悦子

袖口に來てをる螢袋かな
雨の音は安^{あんじん}心の音杜若
ごきぶり飛ぶを掴みて宮本武蔵かな
明易し白樺に耳あててをり
虎杖や長きトンネル抜けにける

栗栖恵通子

どんだけの仏見たかや夏うぐいす
宇宙樹の元に滴りありにける
雷帝と太陽王と濡れ煎餅
炎天の河童の皿を裏返す
行水のあとにうるくずありにけり

大島翠木

身の鬼は葉裏へ廻る青蛙
酔のやうな心字池に墓鳴きにけり
竹皮を脱いでしまつた藪の中
五指をひろげてあめんぼうを覗く
葛あらしたらちねの山濃かりけり

雨村敏子

薔薇の真くれなゐ心のクリスタル
ヴィーナスの貝の上なる天の川
青葉木菟のこゑちかぢかと宮の杜
白玉を母のごとくに思ひける
呉竹に雨の音きく夏越かな

小形さとる

忘られて梅雨のうぶ毛をいらひをる
忍辱の友よががんぼの足よ
堀割を風通りゆくなすび漬
卵黄のしずかに落ちて五月闇
起し絵の耳の大きな男かな

本多俊子

泥鱈汁火星大地の進化論
梶の木に金星匂ふ半夏かな
臑の鉄砲百合に触れゐたる
三界おとだまに大穹はあり氷水
音おとだま霊に吸ひ込まれゆく螢かな

天野きく江

減りもせぬ煩惱なりし麦の秋
日盛りや毛穴開いて髀肉ある
鬼百合を一輪咲かす五欲かな
父の日の土蔵を開く軋みかな
夜はその約束としてかおる百合

槐市集

貴志 桂

梅雨晴間逃げたる魚の大きかり
一雨来一雨去りて原爆忌
昼寝覚捜してゐたる智恵袋
水平線の暮れ残りたり蚊喰鳥
ほうたるの群れゐて音のなき夕べ

久保東海司

野ざらしの壺ならびをり青芒
白南風や神鈴の緒の黒ずみて
鉦ただの櫓に戻り夕つばめ
雨雲のとどこほる峯梅雨兆す
藤椅子に太鼓腹出しねむりをる

近藤きくえ

一輪車くるくる光り夏来る
磐座を斜交ひにして朴の花
未草ひらき音なき宙となり
万緑の瓢箪池のきらきらす
青芭蕉バツハの曲のどこからか

近藤公子

夕映えのいらかの波や枇杷熟るる
青水無月ブーメランを飛ばしをり
舌変へて江戸風鈴となりにけり
頭蓋骨ゆるみつばなし土用波
黄金虫思ひ出したる人のあり



槐集

高橋将夫選

闇のきて光溶けだす白夜なり
枚方 中野 京子

群鷄の朱冠総立つ芥子の花
かたつむり大峯連山片曇り

紫陽花や明るさ戻る遠き嶺

溜息のふはつと出でし螢かな

精霊のこゑ束ねたる青嵐
岡崎 近藤 喜子

うすものや危ふき橋を引き返す

大蟻の思ひつめたる黒さかな

花莫蔭や樹海に沈みゆく眠り

夏掛や浮雲ふはと胸の上

半夏生薬師の壺に触れてをり
枚方 近藤きくえ

神近藤喜子の湯に臉をとつ夏通路

ほととぎす木洩日の坂ゆつくりと

風の香や花天井の薄あかり

沙羅落花波紋様の白砂に

街あかりレトロ口に変はり夏来る
枚方 谷村 幸子

寺紋なる桔梗咲いて冠木門

霊水の若葉にそまる須磨なりし

靴箱に芒種の風を入れにけり

梅雨ぐもりコーラスの声明るかり

河骨みどりや緑みどりの東山
京都 竹中 一花

夏風の木擦れの丘や稚児大師

竹樋に流るる泉を飲みにけり

真清水の重さを背ナに蔵の町

滴りの池に百ある岩の影

北斎の龍虎の前ぞはな海桐
奈良 瀬川 公馨

新松子めつきり雄松おんまつ少なうて

てふてふの蜜の玄室知つてをり

柳絮とんで纏網地獄となりゐたり

爽やかな谷間の風と暮らしをる

銀河往来 高橋将夫

◇「槐集」 観照

溜息のふはつと出でし螢かな 中野 京子
螢を見て思わずため息が出た。どんなため息かは「ふはつと」から想像してもらいたい。そしてこの螢、きつとため息のようにふわつと出てきたのであろう。

大蟻の思ひつめたる黒さかな 近藤 喜子
蟻の句はたくさん見たが、その黒さを「思ひつめた黒さ」と捉えた作品を目にするのは初めて。その感性に絶句。蟻も働くばかりでなく、思ひつめる時だつてあつて不思議はない。

半夏生薬師の壺に触れてをり 近藤 喜子
薬師の壺にはどんな妙薬が入っているのだろうか。ちなみに、半夏生は夏至から十一日目、毒草の「半夏」(ガラスピシヤク)が生える時期にあたるという。

街あかりレトロ口に変はり夏来る 谷村 幸子
街あかりが懐古的な雰囲気になつたという。セピア色の懐かしい写真を見るような、そんな初夏の景なのだろう。

河 骨 や 緑 翠 の 東 山 竹 中 一 花
万緑の東山と河骨の景。万緑の濃淡を緑と翠と捉えているところに注目したい。

てふてふの蜜の玄室知つてをり 瀬川 公馨
玄室は石室の棺を納める室。単に蝶々が玄室に飛んでくるといふことではなからう。ウツボカズラの袋にはまり込んだ虫が思い浮かぶ。蝶々だとしたらムシトリスミレあたりか。

源流は神の膝もと銀河澄む 久保東海司
源流を遡上して、ようやくその源にたどり着くとそこは神の膝もともいえる聖域。見上げれば銀河が澄みわたっている。精神の風景。

九九の算のぼりゆきけり青無花果 近藤 公子
九九と青無花果の取り合わせがなんと軽妙。なるほど、青無花果の現状と将来は九九の算をのぼるほどのことなのだろう。なんともばかばかしいが、なんとも不思議な一句。

言霊の涼しき星となりにけり 南 一雄
言葉には不思議な霊威が宿る。そして今、言霊は涼しき星の姿となつた。言霊も涼しさも日本だからこそと思う。

花芭蕉灯せるごとき門構へ 十川たかし
門の前に芭蕉の花。門構えというからは相当な門なのだろう。しかも、「灯せるごとき」というから、禅寺の総門の景を想像したが、さてどうか。

茅花流し母の生國湖二つ 近藤 紀子
「母の生國湖二つ」に母の生國への深い思いがこもっている。自分がいくつになつても母は母なのだ。(以下略)